

## 29 宮内庁書陵部所蔵、中国第一の

### 針灸証治図説『針灸捷徑』

王 鉄 策

様々な歴史・文化の要因により、漢籍は隋唐代から中日文化交流の役割を担って大量に日本に輸入・保存されてきた。演者は北里東医研歴史学研究所との共同調査・研究の結果、日本現存の中国亡佚の漢籍医書約二〇〇点の存在を明らかにした。この中には宮内庁書陵部所蔵の『鍼灸捷徑』の如く、中国にとって非常に価値のある著作が何点もある。演者は本書について、新知見を紹介したい。

#### 1、作者の考証

本書の現存本には序跋文・刊記・著者名がない。しかし本書の特徴・引用書・別伝本などの分析からすると、著者は明前期の人で、北京の太医院に奉職していた楊敬齋（楊濟時の祖父？）らしい。その理由は、①本書下巻の

一八六図論は『秘伝常山敬齋楊先生針灸全書』に約半分  
の九四図（同書の図版の九〇・四％）が編入された。さら  
に『針灸大成』にも約五四・三％の一〇一条目（同書の楊  
氏治症総要の六六・九％）が編入された。②楊敬齋の出身  
地常山県は楊濟時の出身地衢州に所属したので、二人の  
故郷は同じである。③本書の図を取載する『銅人針灸全  
書』における眼目の図論法には、金台（元・明代に北京の  
別名）太医院の秘伝によるとの記録があるので、本書の著  
者が明の北京太医院に奉職していたことは間違いなから  
う。

#### 2、成書年代

本書の成立は約一四三九〜一四七一年と認められる。  
この間は中国において針灸の経外奇穴が総括・確立され  
る時期であった。そして本書は元末明初期に使用された  
十四経絡以外の中魁等八穴を取載する。この中の中魁・  
独陰・百虫窠三穴に対する注釈を見ると、本書は徐氏『針  
灸大全』の説を採用し、同書のやや前にでた『玉竜経』  
『神応経』に従っていない。故に本書の完成は『針灸大  
全』が出版された一四三九年以降と思われる。一方、中

魁・独陰を正式に経外奇穴と命名し、本書ないし徐氏の誤りを正したのは明太医院々使の方賢らが編纂した『奇効良方』である。したがって『奇効良方』が出版された一四七一年が本書出版の下限と認められる。

### 3、流布経緯

本書は多紀元胤の『医籍考』に著録されたのみで、中国の書目には見えない。一方、本書の内容を転載した『秘伝常山敬齋先生楊針灸全書』『銅人針灸全書』は明中期に福建で刊行されている。さらに本書には、明後期の江南における世医だった何応璧（一五七四〜一六三八）の蔵印記がある事実から判断すると、本書は刊行後おもに揚子江以南と南東海の沿岸に流布したらしい。何応璧の蔵書は数千巻と称されたが彼の没後に散逸し、本書などが日本へ輸出された。『御文庫目録』によると本書が紅葉山文庫に上納されたのは一六五二年のことだった。本書は一八九一年に内閣文庫より宮内庁書陵部に移管された。

### 4、構成及び内容特徴

本書は全二巻で、上巻には総論が多く、おもに『針灸資生経』の針法・禁忌・経穴部位等の内容を網羅する。

下巻は中風・傷寒・雑病・婦人・小児の順次で、一八六種の病気に応じた針灸治療の一八六図を描く。論説は簡潔・実用的で、症に依じて穴を選び、治法の手順等を明記し、病症に応じて綱要を記す今まで知られた最初の針灸図である。そればかりでなく、この精美的な針灸人体図は写実的で、風貌も多様である。なお本書は上・中・下管と宛（原字は腕）等元代に流行した簡略字の穴名、および風勞・風瘰・五噎など若干の古病名を保存し、また版式・文字・図版にも古風がみえるので、阿部隆一氏は元版に誤認して彼の宋元版所在目録に収録している。

本書は中国で数世紀以上も亡失していたが、再び利用されるならば、針灸臨床における実用価値だけでなく、医史文献学・医学文化学など広範囲に大きな意義があると思われる。

（黒竜江中医药大学／北里研究所東医研医史学研究所）